

ブドウべと病対策について

佐賀県果樹試験場病害虫研究担当 近藤知弥

今月はブドウの重要病害のひとつである「べと病」の特徴と防除対策等について説明します。

本病は一般にヨーロッパ系品種（シャインマスカット、甲斐路等）で発生が多く、米国系品種（デラウェア等）では発生が少ないとされています。巨峰やピオーネ等での罹病はその中間程度ですが、防除が不十分な場合は多発生して早期落葉するので、しっかり防除する必要があります。

—病原菌の特徴—

病原菌は糸状菌（病原菌名：*Plasmopara viticola*）で、被害葉で越冬します。越冬した病原菌は5月中旬頃に活動が活発となり、雨水や水滴とともに気孔から侵入し感染します。感染後好適な条件であれば数日、長くて2週間程度で発病し、発病4～5日後には病斑の裏側に白色のカビを形成して、以降再感染を繰り返します。被害は春から晩秋にかけて発生しますが、特に春期と秋期は生育に適した気温（20～22℃）となるため、降雨が続くと多発生しやすくなります。

本年は4月から6月まで平年よりも降水量が少ない等本病の発生に不適な条件で推移したため、発生量は少なく推移していますが、今後も防除対策をきちんと取り組み、発生を予防します。

—被害—

本病は葉や花穂（果穂）に感染・発病する病害です。葉に感染すると、初め淡黄色～淡緑色の斑点が発生し、4～5日後に裏面の葉脈に囲まれた部分に白色のカビを密生します。若い葉の場合はその後黄変して落葉し、成葉の場合は著しく発病した場合に落葉します。早期落葉すると、新梢や花穂が枯死したり果実糖度の低下を引き起こす等大きな被害が発生します。

花穂に感染すると全体が淡褐色に変色して縮れ、幼果に感染すると表面が鉛色に硬くなって肥大が停止し裂果します。



写真 葉裏に発生したべと病

—防除対策—

・耕種的防除

- ①本病は新しく柔らかい組織に発生しやすいので、軟弱徒長しないよう適正な肥培管理を行いましょう。また、枝が込んでいる場合は切除等を行い、新梢の徒長を防ぎましょう。
- ②降雨による病原菌の跳ね上りを防ぐため、敷き藁等を行いましょう。
- ③落葉は本病原菌の越冬源となるため、園外に持ち出して適切に処分します。

・薬剤防除

病害防除の基本は予防です。本病も発生し始めると薬剤散布でも抑えることは困難なので、発病が認められる前からしっかりと防除を行いましょう。また、本病は葉裏から感染する病害ですが、葉裏のみではなく葉表にも薬剤を十分付着させると薬液が雨とともに溶け出して、病原菌の感染を防ぐことができます。手散布の場合は棚下のみでなく棚上からも十分に散布しましょう。スピードスプレーヤーで防除を行う場合は、全前列走行をするとともにできる限り低速走行をしましょう。全列走行した場合は葉の表も裏も十分な薬液が付着しますが、一列おきに走行した場合は走行した列の真上の部分については表側、走行しなかった列については、葉表、葉裏の両方で付着量が少なくなります。

○発芽初期の防除

展葉初期から、黒とう病や枝膨病と同時防除も兼ねて、キノンドーフロアブルやデランフロアブル等

を約 10 日間隔で定期的に散布します。

○開花期～袋掛け前の防除

果粒が小豆～大豆大の時期は、リドミル MZ 水和剤やベトファイター顆粒水和剤等を使用します。大豆大時期以降の果粉溶脱や汚れが問題となる時期に発病がみられた場合や長雨が続いた場合は、ホライズンドライフロアブルで対応します。

○袋かけ後の防除

袋かけ後はボルドー液や IC ボルドーを使用しますが、散布間隔（20 日程度）を開けすぎないように注意してください。また、ボルドー液や IC ボルドーにアビオン E を加用すると防除効果が向上しますので、かならず加用しましょう。IC ボルドーには IC ボルドー48Q と IC ボルドー66D の 2 種類があります。IC ボルドー48Q は、IC ボルドー66D と比較して薬害は発生しにくいのですが、効果がやや劣ります。そのため、ベト病未発生圃場や薬害が気になる方は IC ボルドー48Q を、ベト病が発生している圃場では IC ボルドー66D を使用しましょう。

○収穫後の防除

収穫終了後に防除が疎かになると、本病が増加して多発生する場合があります。多発生すると早期落葉を引き起こし、樹勢が低下するとともに落葉が次年度の本病の発生源となります。収穫後も銅剤で定期的に防除を行うことが重要です。

本病は、発生する前からの定期的な防除で被害を防ぐことが可能です。降雨等の影響で防除間隔が長くなると発生しやすくなりますので、定期的な防除を心がけましょう。